中村俊定文庫
文庫 18
77
1

延宝二

藤枝集

維舟撰

福田文庫

た

（　　）

何鑑　試哥仙

維舟

白雲もたゞよゝや峯の花の数
鳥と酒とに名残の庭敷
置銭を旅立者や祝わらん
はく草鞋も足も強かれ
碓のよゝ月影の朝ほらゝけ
背戸門開く小家露けし

レ一オ

中村俊定文庫

あれハ白く是ハ色有むくけ垣

いくつかひとふ秋の蝶〳〵

孫つれて花もあそばん日嘗に

つゑの長たの竹馬をかし

ろくを見てすへぬる炙いたのもしや

何とかなして居に仕へむ

扇程お手に馴たやお腰もと

冬は火桶といたかせ給へ

六の花むつ言ひとつ二三

茶碗たてかけもて来る女

10 20 新宿甲州屋特製

草臥を休むる宿に月の暮

しとろの袂紅葉かたけて

名 苅萱の陰にかくれて鶉鳴

野へもまちかゝ山庄の景

終の身の記念や哥を百の筆

狐川よりたゞさかへす人

逆馬羽も牛に任て春の田を

宮もわらぬも花にさゝめく

氏神の祭の警固かすまめや

日のろ池涼し大原の春

比良横川山復山に傳ひ猿
嵐にもろみて木実はらく
やとる月露もあしたにさらハ
夢同に魚と鳥見あはせて
鏡こそ化粧道具の二あき物
おつとを恥て羅後の夜
部屋住にすへ置るハ宿世とや
風かろかろす文を受へり
武を以治むる時や其昔
第一堤の水筋はよし

10 20 新宿甲州屋特製

寛文十三年春

何日一句

独吟　維子

哥の事は蔦とうらへてよませけり
くれなゐの梅しら蝶の舞
春の日の陽はあやかる酒呑て
道つれからに旅ハさなくさむ
又やどん角名ところの物流
よれ聲かはり世と狄風

夕月夜 厚も乱て 衡かけ

たすき身にしめ今日も釣人 しをオ

うろ髪をつくるもあやぶやせこけて

いつかかなけん つらい物やう

文言葉かつ——いあいてさ夜衣

せめて地ろと夢の面かけ

明星も我を哀とおぼしめせ

霜の童子の馬大津道

たはこさへすハてさ、ろ元い関の前

手を尽すべき結ひの相模

10 20 新宿 甲州屋特製

哀かしこ見るも線なり踊ふり

月もはつかし多きあたほれ

たふらかすとハ思へ共うかれ妻

寿も我らも こかるゝ恋慕

花もあき浦の笠尻ハ尺八を

春は指先よ水海の鯉 しをウ

=逢坂や坂逆 西 逆こそ長閑なれ

鶯はたしとて明神まうて

道遥と重したまひて哥も有

すゝ風の手のよする川なみ

布さらす深みハ渦や槙の嶋

見る度ごとの星はしの景

柳甲す我其赤て髪ゆはん

うす朝かへり人はしるよい

ひめ子にと祖の玉章をこめ

用ゐたす御香も後下屋敷

心へたて水の夫ませる

三五夜の月を見ましてゆかし

水の面には花大えなりぬ　山オ

言葉新し酔をすゝむる川ばた哉

新宿 甲州屋特製

滝沢岩ゐ　さてもひやめく

庭之秋ハをもとひとつはさかり花

日の目に笠の隈もかくれす

也よハ蚊風はさみ歩廊廻り

ひよこをつる親のめん鳥

在郷の背戸門も夜も明離

茄子青田の露たまをなす

稗もしや雨のやしなわさゝり粒

夏の暑気をわらわもくせ

道くに昼眠大の先生して

様としの名そ暮にまさるゝ

庚摺の衣紋を月に花に見とれ

柳に鞠を蹴るはいとをし　「四ウ」

三

春雨もそゝくや心小若衆

鳩うめさ　ぬる　比寺の塔

古畑に近き八坂の里なつれ

かりがねあやし風のひらきど

独居の子ハ金沢所人やあなつらん

野上にさゝ元紀てくるふ

荒駒は豆飼てましなつけすし

10 20 新宿甲州屋特製

いくさは旅の未〳〵まても

一の谷ひよ鳥越の逆しるへ

須磨の若木のさくら最中

霞くむさかふに好むかいつ物

めつらしく今の来る春の礼

御灯炉月にかゝくる氏　祀

耳すゝーや知足ちの音　果　「五オ」

三ウ

こい紅葉色めく唐めく毋よそひ

大井の川や安この行　幸

嵯峨のかたかたいし丈と一見に

茶屋にまれとやかまの音
生血ある顔にまよふハ習そや
さらり 元床しきたてのそめ物
迷ふまは詞も学ぶ上京に
主とりすもふ後の出かけ
こしらゆる刀のつばハ菊の花
未長月のかけのけんわく
よめ君をやかてもわかんしたい
化粧のろをも造る小座敷
花も之南あり ハ笑の眉

10 20 新宿甲州屋特製

そたつ素子の数はいくばく 五月
名にしおわ越前鯖や むし鰈
順の日よりや気ケ比の海つら
舟の帆はぬさの追風一はいに
さらば〳〵と遊女のなごり
うつけてはゑえぬうはべの情ろ
買そんしぬる市のいろ品
面の見わの過しハ思ふ様
素麺やえまつりもてなす
今日待てあるハ二のほしいまゝ

姉し泣する目は露涙
約束もかいくぬ末の杏の色
月人あとこいまかへり来る
年波のしはたいみこむ箱のうち
次第に長くなるあさ袴　レ六オ
出仕する侍ろけしゆいしけに
御門跡こそ重くしけれ
たぐひ又并の岡のひわの撥
杏の之こしの入日たろうとき
花の色ます嶋基のまろけして

10 20 新宿 甲州屋特製

勅使の志元とけて春めく
池の氷あちこち吹る春日野に
涙てふ魚と水のせんべい　レ六ウ

何帆　戸ニ

維舟

たゝみさはり又よみ物や花造

胡蝶にさるゝ宿の若　猫

日のあたる庭の廣縁長閑にて

音なひ姫ー　楊弓のまと

かゝりには猫あより有遊ひわさ

あつさつゝみ多川の水

黒鴨の子も泳走る月の鬼

芦辺の人に鰲そおとろく　しを

10 20
新宿 甲州屋特製

笠屋形頃ゆふ縄の肋足せて

市の荷数をつゞ畳にけり

流まれる日金わたらへ心やす

笑用いつちかゝる菅かさ

笛のあハれ漁夫し知舟の舳に

かつはとなくる水屑悲しさ

中〳〵に爰染川の脇たちや

ふたつのほしはなみたよ雨よ

目くら恭なゝ杖をや月の下

とかせてもてる鎌は冷ー

出カ

ひたすらにあふへき鍵を頼にて
生れん国は頼もしの禪迦
百八の菩提珠や藤春日山
春のかきりの入逢こんく
二 待神の追風用意かすまめや
妻戸きりいと押あけてあふ
手を取て先い忍しやくの一言を
御脈の祈は今朝さゝろよき
弥しく外出弟遠弟出になくさゝて
奏よ幸のはやくもそたつ

陽に咲近江菜の花物見也
月はおぼろに水海の景
岑ハへの岑山けふの岑や帰鳥
身はいつ迄か遠つ流され
鳴音の高き鼓は若さかり
浪河かすわけおよく大川
先かけハ馬といふその頼にて
重きもよしや小栄骨栄 ハ丸オ
三 野ゝ宮の黒木の鳥居雪をかふり
鳥一二羽森のさひしさ

肌ふれぬ　暑よし　水鏡　なれ

ひさをりたきて　夏物　買ひ

つめらるゝ　身こそ　わるさをくせなりめ

岩のはざまを　又　うこかして

杖ふりも　こと　木にかゝる　雲の　凡

丸太舟　出す　からさきの　はま

笠をして　引や　志賀津の　網の　魚付

たゝかハこはも　去　春の　客人

花は是　殺句すゝむる　題　そかし

月や　青嶺　酔の　さかつき

1020 新宿甲州屋特製

思ぬる　夫　雲　虫の　ねんころに

秋の野山の　旅　うみ〳〵し　八ウ

三　岑入を　哀と　思へ　わらちせん

茶屋　余　所にの　こ白雲の　中

ふり袖と　夕暮ハ　いつ年　七へぬ

恋も　無常も　をのか　様〳〵

今こそハ　真の　佛　嵯峨のおく

法のちから　たつねあ　ころ

二七との　すきし　昔を　こま〳〵と

こゝろを　そへよ　酒つくる　家

めてたきハ刀さすかの元服に
曽我も兄相根も遠さかる也
夏卯木秋の萬菊も蔓芋
竹の子もさそ雲茸の味
息笑にすめるや月の郁人
勝手宜く足てうら山し　九オ
誰筆に是にハ爭屏風の絵
りいばゆしと桟敷かけぬる
聞香の薫なつかし其名さへ
ほのかに見ゆる遊女優なり

10 20 新宿 甲州屋特製

花薄乱こころのあさ言葉
露さへ玉さへ飛おもひ草
羽かはす鳥の中よさ月の前
いつも深こハ臭たまり水
足おつくし除て櫓をすなには船
車足つくる位すしのかた
糸を引蜘かわさこそ里習ひ
かくれ納豆ハ上手の聞え
花を摘水くこ齋の飯を焼
そのきさらきの詠哥の巻れ　九ウ

名
まなこ高き人たゝかひし一の谷
ことはもとかゝる釘てふくやね
近隣長隣いそく用心に
青き紅葉も面白のつ（也）たか
足し人と露の多物いふ宇津の山
月もまばゆし岡辺の宿世
琴ひくを床しと文をあそばして
おぼせに琴ゆく庁折戸
頼ぬる人の若子のおち人
無力あさまし左衛門の尉

10 20 新宿 甲州屋特製

ねらひ矢はやこころに矢は鹿も敵
刻る龍田の山だちあもふ
夜半に行河内通ひは呂独
鯛荷をもつに様か言つて（ナオ）
ゆ恋しさも神を知らん忍ひす溝
袖もあみたの時雨の時分
麻の衣紙の食をつくろひて
爰を家先隠遁の山
忘てハ多かと小野の奥住居
手なゝひやたゝ淋しきまされ

六月のこゝろの花に見めきて
うくひす笛そ耳にしたかふ

十ウ

10
20
新宿甲州屋特製

何会 序三

組舟

すゝふらゝや地を行産柄狩
もつはかすすめぬ弁当の飯
家造るたゝ之や春に多かゝ
乗や風ゝ鯨の糸筋
地ゝゝ池に柳の一葉つゝ
暮れは三り月もそり橋
露の子に髭さかやさを改て
おそばさうすの仕へとをしれ

十オ

紙燭見や例のうるさき色好
おとなびたまふ姫の庵寒
手習もそろべく候に書捨て
わすれがたきともつゝ箱根山
筆の一夜霖言は京の事はかり
明日は桜を内裏も所も
世業て皆々酔る時も有
天もや花の真似を白雲
口笛は小〳〵と掉の唇
わたるつはめや是春の客

10 20 新宿甲州屋特製

永日に神輿いさむる氏子共
雲の景さ（から）さきの月
丸太舟跡見ゆる迄紅葉鮒
水鮒のなますや只一さかり
上ゥ

二

未久に主をたのむの涙しれ
後の二日もそゝくさいの炙
若いとて心かま（は）は歩道を
様を思（は）なに木情山
肌にめすはなし染もなつかしや
之とりの帳にならへし枕

大海も手てせく泪うき別
かたしけなしや釜入寿見
手筆に字る佛の壹立て
いたゝきまつる春日の社頭
月影も朧気なゝめ設未
君かけてしもおもふ通殿
お物の名におふ赤備や遠浪風
姑て向ふ碁盤あやしき
ヲ山菅や山橘も髮そきに
秋はいろ〳〵の花灯炉ゑて

一十二才

10 20 新宿甲州屋特製

踊子や月の息をも忍ひ笠
ふく恵風も昌さ弼すな
御殺川かハゆかられて見たいのえ
奥と水との中うら山し
思ひなくハ綱代屏風に神枕
なくさみ草はは蔓芸一ふく
たにハ路の山坂、の旅芸ゑして
武士はこゝろの色も赤星
直垂も芸やさ討死戦場に
出狂坊とてまはすハおかし

かゝる山くゞつを花と見てゆかん

伊達にぬふてふ蔦ころも　十二才

三

中ちく王紅粉のかすある脚布もあり

約束したるえにハふかしふ

玉取は勝に千尋の縄をつけ

伊勢の湾にて拾ふ貝籠

海道は旅ふ旅の泊く

竹札に猫もおさまる時代

神勅の宮井伏見に見えなハし

宇佐八幡の奉幣ゆゝし

10 20 新宿甲州屋特製

白鷺のむれゐる松もなひく籐

蕣の蟬も施餓鬼のすゞ経

参多き雨嵐山寺見えて

蜻蛉をあかせな月もまたゝく

道遥のまうけを出す川は夜に

あれハ京左蔦(カサイ)西　浅草　十三才

三多

只たのめしめちかゐと聞え給ふ

あなゝ今年の恨の詠哥

待侘て新枕こそ是非なけれ

いまた生血のえゆるかはばせ

あるはハ身をけさ迄も較にくハん
たぐひ〻那智の滝の荒行
去をのれ住千日の山こもり
あさましく為人のなて
肌ふれハ毛の毛穴の白妙に
綿の仕事をかことの情
兄 弟
乞計寒きハよしや才〳〵
氷れる筆も日の目待る
月花いつ春迄のつく〳〵し
つむよめが萩葉名来しき

10
20
新宿 甲州屋特製 L三ウ

名
こ蝶にも誘引せらるゝ野への末
ひけなつるさへ我かたの弓
弥しや奥に年寄する琴の曲
中庭の進凡ゆうなるたあ
うつ〳〵み〻童の衣の色つやも
よよふ古〻ろのおく小姓乞て
しのふ山忍ひてかよふ口設文
桑のうちまてなみたの時雨
やいろかふ霜の冬菜をかうしあ
むしろそひゆる近江路の末

軍兵の袖に馬場の秋の風

歩を見月の夕の將棋

屋かけあしたの出湯あく絵ひ

めてたき物やちやめのかつう　高才

人々もそもそ女はもてなさん

五の枝まて似する意草

花のしん之こし前置さすかにて

長閑たりける御殿（屋）

居の日の老にあたる能太夫

書初するこころの事

10 20 新宿甲州屋特製

富士坂雅も心の水もいさぎよし

神の白洲や川門の小石　西ウ

何處ぞ四

紙舟

まつ八古しまたぬハ新しみ規
にをひなつめく花柚橘
上かゝの盃のすゝん流末て
うたふ儀之の聲水の音
豊なる旅面白き山の内
赤ゝ弱中冬を除ぬる
月落て鴉か起す霜朝に
川筋もふ星の橋〳〵

10 20 新宿 甲州屋特製 しをり

ウ
雲雀も真砂の数や漬の市
足やこ近くの繁昌をする
何風もやハらかに吹其向え
杖白妙のを錦いくはく
河内女の在所かくれぬ月の秋
長き夜事にや居かいたつら
うとすしや夢之る初にうこかして
サ
小蠅飛かふ昼寝のまくら
雑はよたれに汗にしたるや
思いろ〳〵にかなるかたひら

名香をつきてもてなす帳の内
千世も人には添てましませ
金花かさる刀を引出もの
朱唐駒は粤勿そたち　十五才

二

朝寳を未野字埴野狩せたり
かすうの隙をゆくきさふゝ
奉公に行の氷ふみかふり
鼓汁とてこのみませたまふ
邊土方にちりにもなる茄子
ひとり笑ふやゝ夕かほの花

10 20 新宿甲州屋特製

仮初に美豆野の妹か早なつき
いくたひ淀にくむなさけふり
旅立の折知なみた目に餘り
あきらめかたき無常のならひ
大方は法をもめてし法後に
馬はまれとも川をかちにて
人の口木惜の月に忍ひ妻
峠の茶屋のちきり身にしむ　十六才

三

小原風の絵に近山の村桃
まつりえはやす桟敷の上

けたひはぬさも取あへず車の内

すはや出ろれはしる追風

隠岐の嶋名和の湊やすち向ひ

蛇ほすくすき辰巳の日あたり

数鐘のさやわかすしも雪ふりて

はつる芝居の菊戸太鼓

中着はきらんと思ふたなゐ

痩にぬなる茶たしなむ

我得たる八卷の経の声たちて

波も五色に明る大比叡

10 20 新宿 甲州屋特製

月いつら花ハあちこち相まし り

楊枝かすませ 搗餅出す

三 春雨の淋しきまふ親のもと

沈の香しめる寺の佛壇

うめきつゝ吳る物や 鳩の声

竹のおくなる雀かしし

夜床寒を日たくる迄ハ念もふや

中前伺公の迫習たれ

左和田方は地ゝぶとのゝしりて

海見やらるゝ ちさし野境

うち砂も尾花につく涙かな
千鳥ちりしうづら啼くくはい
学文は暁月にいさめられ
十五の袖ひろをふさがん
訪しき乙女し思ほす旅衣
見の秋理のあかれやいする　一セオ
花之衆くはいる君の木の下に
ちれる鳥やから柄の秋
彼岸共思ひの玉ハくりやらて
談儀は眠もよほし草か

10 20 新宿甲州屋特製

さりとてハ何を一てかく尾の暮
袖の白露を借銭のふち
夏の水したしきも秋に疎くし
寂も我も置さりはにく
十八の月の丸点のおもひ
うみ恵いのる観音さつた
市心中いはいはけしき山下風
恬交たいせる四良の見恢し
遠方にも連奇を志賀の里の長
五月に夜ふ舟の乗そめ　一セウ

名したり條風さへ水さへ柳色

つはめ田にしも黒き田の土

蕚ふきや大雨ふれと物流

四の結おかし逢坂のやま

緬羊の目に足とかむる関のさへ

ふだいそかはし結の折から

御領分あるゆ里の捉しれ

近年我は長井の居住

浦舟の友達の別をし留て

流たつるかえくは千きむ

10
20
新宿 甲州屋特製

もつ酒の小妻成たやいたかれん

なよ〻かきぬの小妻そしたふ

さゞ絵ふ詩世袋ハ月に日に

なくさえ草や姫のほろつき　一九才

ウ

挑燈も数をならふる影灯炉

千夜を一夜とをとり事

胸のうち苦しき病いかにせん

馴しあつまの花や母うへ

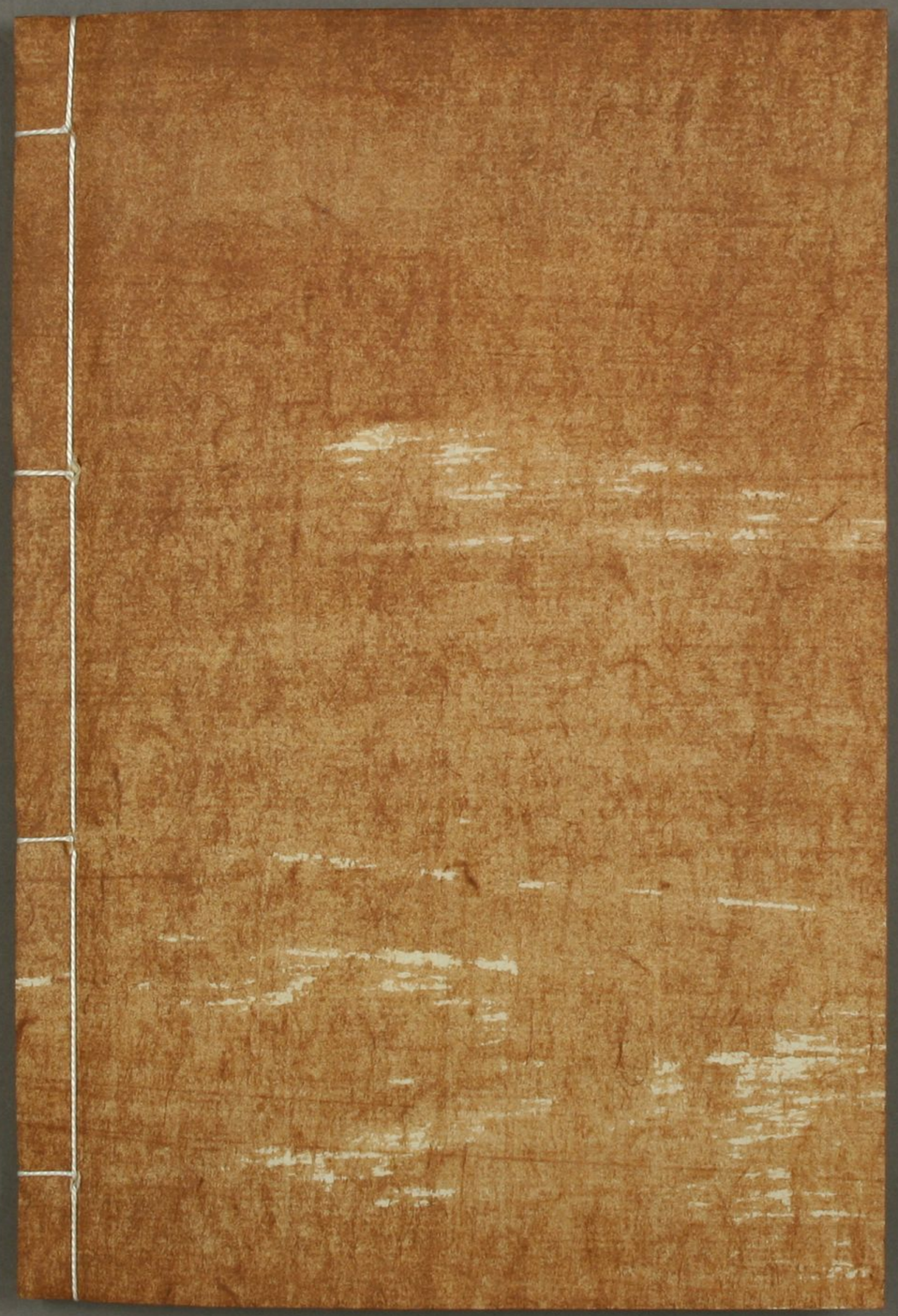
春の景色うなかす橋川

長閑き水の筏とく

いつか拝御堂を拝申へす

関白殿の威光日出度

しるし

明治廿三年五月十日　坂合子　俊宅

10
20
新宿甲州屋特製